

みめぐみの

第51部



みめぐみの

第51部



◎

大谷光道著

目次

近くて遠い?『正信偈』(一一)	2
十二種の光	4
阿弥陀様の本願と私たち	8
新幹線に乗ろう	10
準備は大変!	13
御宸翰	17
はじめての酬徳會	18
例えば	20
どこにあるの?	22
持ち出し	24
僧籍削除	25
来年も	27
読者の貢	29
寺務所からのお知らせ	30
あとがき	31

近くて遠い？『正信偈』（一）

今回は、「光」の話で始まります。

仏像には後光が付きものです。光は仏様のお智慧を表すことになつていますが、それは何故でしょう。

何かいい思い付き、アイディアが頭に浮かぶことを「閃く」と言います。

また稻妻のような「瞬間的な鋭い光」のことも同じく閃きと言います。アイディアが頭に浮かぶことと、稻妻のような光と、一見、何の関係もないことが同じ言葉で表されるのはどういうことなのかを、私は考えてみました。

いい思い付きが頭に浮かぶと、ワクワクして目の前が急に明るくなつて、



新しい世界が開けてくる思いがします。長い間、闇の中であつたところに急に光が差し込んできたような思いをするのです。光は、私たちを勇気付け、安心させ、ワクワクさせる力となるのです。反対に、「……には光明は見えない」「出口の見えないトンネル」などは、光——つまり安心できる心境——にたどりつけないための不安や絶望を表します。

このように、私たちはワクワクすると心に光を感じます。心の目は光を見るのです。現実世界の光と心の世界の光は、まことに不思議なつながりを持つています。

智慧とは「覺りに至る力」だと説明されます。仏様のお

智慧が光として私たちに届けられ、私たちに大きな力が与えられるのは、このような事情によるものと考えられます。

十二種の光

そして、光が私たちに与えられる、その与えられ方は多種多様です。親鸞聖人は、私たちにこのような喜びを与えてくださる阿弥陀様の光のお徳を説いてくださいました。それが次の五行です。

普	放	無	量	無	辺	光	普く、無量・無辺光、
無	碍	無	對	光	炎	王	無碍・無対・光炎王、
清	淨	歡	喜	智	慧	光	清淨・歡喜・智慧光、
不	斷	難	思	無	稱	光	不斷・難思・無稱光、
超	日	月	光	照	塵	刹	超日月光を放ちて、塵刹を照らし、
一	切	群	生	蒙	光	照	一切の群生、光照を蒙る。

あまねく、無量光、無辺光、無碍光、無対光、炎王光、清淨光、歡喜光、智慧光、不斷光、難思光、無称光、超日月光を放つて、数知れぬ世界を照らし、あらゆる生き物は、この光に照らされ、その利益を受ける。

ここに、十二種類の光が登場しますが、これすべて阿弥陀様の光です。何故十二なのかというと、本来数えきれないほどあるのが阿弥陀様の光明のお徳なのですが、それをいろんな角度、視点から捉えて、十二に分類してまとめたものです。

一、「本体」を言い表したもの

まずははじめの三つは、「名は体を表す」と言うように、その名の通りこの名がそのまま光の徳を表しています。光の本質、実体、本体そのものです。

- 1、無量光 \parallel 分量が多くて、量ることのできない光。
- 2、無辺光 \parallel 辺 ほり つまり際 きわ のない光。際限のない光。どこまで行つても明る

さが衰えて終わることがない、暗くならない光。

3、無碍光^{ムヘイカン}＝何物にもさえぎられることのない光。

二、「姿」「相」について言つたもの

次の二つは、光の特徴、属性、徴候といった、外面向的な特徴を表していく、外から見える姿、見え方から光の徳を讃えています。

4、無対光^{ムヘイカン}＝何物も対^{むか}うこと、対抗することができない光。

5、炎王光^{エンノウカン}＝この光を、盛んに燃える火にたとえて言う。この光の力で煩悩の薪を焼き、衆生が覺りを得るという利益がある。

三、「作用」「はたらき」について言つたもの

その次の三つは、光の作用です。作用、はたらき、効能の面から見たものです。

6、清淨光^{キョウジョカン}＝衆生の貪欲（貪り）を除く清らかな光。

7、歡喜光^{エンギカン}＝衆生の瞋恚（怒り）を除き歡喜を与える光。

8、智慧光＝衆生の愚痴（無明、愚かなこと）を除き智慧を与える光。

四、時間的に見たもの

次は、時間的に変わらないことに着目したものです。

9、不斷光＝常に照らす光。途絶えることがない光。

五、不可思議としか言いようのない光

最後の三つは、どう考えても理解できない、我々凡夫の考え及ぶものではない光の徳についてです。

10、難思光＝思いはかることができない光。思いをめぐらしても、イメージできない光。

11、無称光＝人に説明することができず、言葉の及ばない光。

12、超日月光＝日（太陽）や月の光を超えた光。月の光は一見、太陽の光より弱いようであるが、夜の闇を破つて、人を導くという大切なはたらきがあり、昼間の太陽と夜の月は、共に私たちを護ってくれている。その太陽や月

の光をも超えた、何とも言い表すことのできない徳のある光。

阿弥陀様の本願と私たち

本願名号正定業 本願の名号は正定の業なり。

至心信樂願為因 至心信樂の願を因と為す。

成等覺証大涅槃 等覺を成り大涅槃を証することは、

必至滅度願成就 必至滅度の願に成就したまへり。

(南無阿弥陀仏という) 本願の名号は、衆生が極樂淨土に往生する業である。それは至心信樂の願が基になつていてある。等覺といふ菩薩最高の位に登り、覺りの世界に至ることは、衆生に「この世でやがて仏になるべき身に定めて、お淨土で覺りを開かせてやりたい」という、阿弥陀様の願いが完成したからである。

この部分は、たった四行という短い中に浄土真宗の信心の要が凝縮されています。それだけに語句も難解なので、もう少しゆるやかな訳にしてみましょう。

『阿弥陀様の本願の真髓である第十八願に、「極楽に往生したいと心底から願つて念佛を称える者を、必ず極楽に生まれさせてやる」と誓つてくださっている。このように、念佛を称えることは阿弥陀様のお決めになつた方法なのだから、このこと一つを信じて念佛することで、間違なく往生が決まるのである。』

また、第十一願に「必ず滅度（覚り）に至らせる」とすることから、この世ではやがて仏になるべき身に定めていただき、往生した後、等覚という菩薩最高の位に登らせていただけるのである。』

新幹線に乗ろう

この四行を称えると、いつも新幹線のことが思い浮かんできます。

東京へ行くのに新幹線に乗ると、

『This is the NOZOMI superexpress bound for Tokyo.』

というアナウンスとともに、前方のドアの上にある電光掲示板に表示されます。

私は、以前から何で bound なのか、新幹線に乗るたびに、ぼんやりと考
えていました。そしていつも、bound は、終着駅を東京に「縛られている」
「括くくられている」という意味だと、無理に自分を納得させていました。さら
に、私の拙つたない英語力の頭は、「何も、bound なんて難しいことを言わずに、
go to Tokyo と言えばそれでいいのに」と、熱くなつていきました。

それでもやはり、どうしても気になるので、辞書を引いてみました。する

と bound には、

1、縛られた 2、（ボールなどが）はずむ。バウンドする
3、境界。限界 4、（船・列車・飛行機など）～行きの
という、語源を全く異にする四つの意味があることを知りました。

したがって、新幹線の bound は、この四番目の意味であつて、1 の「縛られた」ではないことになります。さらに調べてみると、この 4 は、古ノルド語の「準備する „buinn“ „bua“」が語源で、今の英語の ready の意味となるのだそうです。

„bound for Tokyo.“ は、「東京行きの準備ができる」という（列車）」だったのです。

私たちは、「京都を何時何分発ののぞみに乗れば、何時何分に東京に着く。そうすれば、何時までに目的地であるどこどこに着ける」と、時刻表で調べて、それ以外は何も考えることなくその列車に乗りります。



闇如會

「準備ができる」とは、今まで全く考えたことはなかつたのですが、よくよく考えてみると、列車の出発する前の整備・点検、車内外の清掃、運転手はだれで車掌はだれで、ということはもちろん、そもそも列車ダイヤの作成から始まる運行についてのあらゆる作業があります。また、その列車が安全に通行できるためには、一つ前の列車との距離と一つ後の列車との距離を一定以上空けておく必要があり、もしたとえば、前の列車に異常が发生してやむなく停車したときは、後の列車

も止めねばなりません。このような安全の確保。

そして、何よりも新幹線が存在しているという大前提があることです。それには、列車の設計・開発から東京までのレールを敷く工事を始めとして、我々の想像を遙かに超えた数々の努力があり、そして膨大な時間とお金と人手をかけてでき上がつたことを、忘れてはなりません。

このように、「準備ができている」には、気の遠くなるような中身があります。

準備は大変！

準備といえば、阿弥陀様の本願がまさに準備そのものです。阿弥陀様は、私たちを救おうと四十八の願を起こして、私たちの想像のはるかに及ばないご苦労をしてくださいました。そしてその本願のすべてを完成させてくださいたのですが、それは一言で言うと、「衆生を極楽に迎えて成仏させる（覚

らせる)ためのあらゆる準備をしてくださった」ということです。この四行は、まさにこの「準備」を、短い語句で讃えられたものです。

私たちの目の前には、本願を信することと念佛を称えることが示されているだけで、私たちの見えない奥のほうにある大きな部分が本願の本体です。まるで海の上にその一部分を出している氷山のようでもあります。

また、今見てきたように、私たちを東京に連れて行くためにあらゆる準備がされたものが、新幹線です。「準備」は乗せる側のことですが、反対に乗る側から見てみると、時刻表を見て切符を買うこととその列車に乗ることだけで、上に述べてきたような準備されている中身についてはまず全く頭には出てきません。私たちが「準備」についてまで深く考えたことがないのは、新幹線は「乗りさえすれば私たちをちゃんと運んでくれる」ということだけを信じていればそれで足りるからでしょう。

私たちにはとてもない阿弥陀様のご苦労を知ることはできず、またそれ

を実感できる能力もありません。「本願のお蔭で極楽往生できる」とだけ信じて念佛を称えるだけです。

知らぬ間（他力）に本願を信じる身となるのは、無意識のうちに新幹線を信頼していることと重ねてみることができます。念佛を称えることは、切符を買って乗るという行いと重ねてみることができます。

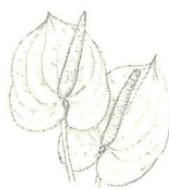
さて、この間、韓国で多くの高校生が犠牲になつた船の事故では、この「準備」が徹底的に問題にされましたね。そして事故によつて船や船の運航の在り方から、はては政治に至るまでが信頼を失つた事件でした。

無事故を誇つてきた新幹線なるが故に、人々の信頼を得ているのですが、――考えたくはないのですが――この世のことである以上、「とことん大丈夫かと言えば、それは何とも言えない」のが阿弥陀様の本願との違いと言えば、ここのこところでしょうか。

「準備の大変さ」は、何事によらず通じることです。身近なところで、毎

日の食事一つとつてみても、準備のためにかなりの時間と手間を要したもの
が、口の中に入つて消えるのは一瞬のことです。欲しいものはまず何でも手
に入る時代ですが、製品として提供されるまでの準備を考えると、途方もな
いほど多くの人の手間を経ていることが感じられます。お金を出して受け取
るのは一瞬の間です。

阿弥陀様が途方もないご苦労によつて準備してくださつた本願によつて、
私たちはそのお心をいただき、たつた一声の念仏でも往生させていただける
のです。



◎

御宸翰

「ごしんかん御宸翰」とは、聞き慣れないことば、見慣れない文字ですが、天皇の御直筆——ご自身がお書きになつた文書——のことで、宸筆、親翰とも言われます。今年の闡如會せんにょえには、『本願寺に伝わる御宸翰—天皇の墨跡—』と題し、本願寺に伝わる多くの宝物のうち、鎌倉時代の龜山天皇（1249—1305）から江戸時代最後の孝明天皇（1831—1866）までの御宸翰を中心に、全部で二十五点を展示しました。なお、明治以降の御宸翰等については、また別の機会に譲ることにしました。

歴史の中で、日本の伝統文化の中心的担い手といえば、やはりそれは天皇

であり、したがって御宸翰はその粹と言えるものです。その文化の深みを地方の門末に伝えることも、本山としての本願寺が担ってきた役割の一つだったのです。この展示により、御宸翰や天皇ゆかりの絵画を中心として、皇室と本願寺との関係を今に伝える文物に触れていただくことができたと思います。

はじめての酬徳會

かつて（下京の）本願寺では、毎年「酬徳會」しゅうとくえという法要を行っていたものですが、次第に縮小され、かすんでしまったという経緯があります。それで、今年からそれを復活し、闡如會においてお勤めすることにいたしました。

「酬徳會」というのは、歴代の天皇を中心に、今日まで特に宗門の外から本願寺を支えてくださった方々に対して、そのご苦労に感謝してお礼の気持ちでお勤めするもので、その字のごとく「徳に酬いる集まり」という意味です。「むくいる」は「報いる」とも「酬いる」とも書きますが、御開山・親鸞



春の宝物展

聖人を中心とした報恩講に対して、こちらは酬徳會と、こちらの字を使います。

去年は、闡如会の中でお勤めした母・歌徳院如智禪尼の二十五回忌を機に、婚礼の道具などを中心に故人を偲んでいただくべく、「大谷智子展」をいたしたところ、お蔭で大盛況でした。そこで、他の宝物も順次観ていただきこうかということになり、今年は初めての「酬徳會」ということもあって、まず、皇室の関係の物を観ていただこうということになつたものです。「御

宸翰」の専門家や書に関心の深い方を中心に、多くの方々に喜んでいただけたことは、誠に有意義だったと思います。

例ええば……

展示した一々について、ここで具にご説明することはできないので、毎日新聞、京都新聞などの一般紙や、宗教各紙の記事になつたものを紹介しておきましょう。

1、今回展示した中で一番古いのが鎌倉中期の亀山天皇の御宸翰で、懐紙に和歌二首をお書きになつたものです。亀山天皇はここ嵯峨とたいへん御縁の深いお方で、亀山殿（今、天龍寺のあるところ）という所で政治を執つておられました。嵐山の亀山公園の名称は、天皇を荼毘^{だひ}に付した（火葬）塚があることにちなんでいます。

そして、私たちにとって何よりも大切なことは、本願寺第三世・覺如上人

が龜山天皇から「久遠実成阿弥陀本願寺」という寺号（寺の名前）をいただかれたという深いご縁があることです。これにより、それまでの「大谷の廟堂」に寺号が付加されたのです。つまり、宗祖親鸞聖人の御廟（お墓）が寺院の性格を持つことになったのです。御廟は親鸞聖人の追慕のため、寺院は聖人の教えを宣布する場所。今日まで、この両方の性格を持つて来たことが、本願寺の伝統の大きな特色なのです。

2、戦国時代から江戸時代初期にかけての後陽成天皇が書かれた「五十首和歌」は、他に宮内庁と高松宮家の二例しか確認されていないという貴重なものです。

3、新清和院（1779—1846）がお持ちになっていた「伊勢物語絵巻」。新清和院は、後桃園天皇の欣子内親王で、光格天皇の中宮となられた方です。出産された皇子を二人も幼少で亡くし中御門天皇の皇統が途絶えることになるなど、不遇の人として有名です。夫・光格天皇の崩御後、皇太后となられる

のですが、翌年出家して新清和院となられました。

この「伊勢物語絵巻」は、今年の闡如會で百五十回御忌をお勤めした、本願寺第二十世・達如上人が、新清和院が亡くなられた際に、お形見としていただかれたものです。新清和院は、達如上人の裏方のいとこに当たります。

4、第二十一世・嚴如上人から献上された庭の梅の枝を愛でて詠まれた和歌の懐紙で、孝明天皇の御宸翰。御宸翰としては、「嚴如上人宛」という固有名詞が入っているところが珍しいものです。

今年の展示にあたっての調査は、かつて歌集『白萩の道』においてお世話になつた、立命館大学文学部准教授・川崎佐知子先生が、ご多忙の中、時間を割いて行つてくださつたものです。ここに、誌上にて御礼申し上げます。

どこにあるの？

ところで、毎年飾つているお雛様や昨年の母の婚礼道具を中心とした展示

のときも同様でしたが、

「このような品々は、一体どこにしまつてあるのですか」
という質問をされる方が多いのに驚きました。

「いやー、それを明かすのは用心の問題もありましてね」と
言うと、「ああ、なるほどそうですね。失礼しました」と、納得してくださいます。

もう一つ、これとよく似た質問で、

「下京の本願寺から借りてこられたのですか」というのがあります。

なぜこんな疑問が生まれるのか、私はすぐに理解できずにいましたが、やはり、新しくできた嵯峨の本願寺に古い物があること自体、不思議なのでしょう。この疑問を解くためには、その経緯を説明するしかなく、あまり良い思い出でもないのですが、ご説明しました。



大谷楽苑の合唱（闡如會）

そして、本誌読者の皆様にも、眞実を知つていただかねばならないので、要点だけでもお話ししましよう。

持ち出し……裁判

下京の東本願寺（現・眞宗本廟）では、代々法主が所有・管理してきた物の入った「宝蔵」と呼ばれる倉があり、法主のみが物の出し入れを行っていました。昭和五十九年三月、眞宗大谷派の内局が「研修道場を建てるため、宝蔵を移築する」と言い出し、法主（先代闡如上人）の度重なる制止も聞かず、

実力で中身を出し、持ち去りました。

当時はすでに、内局はあらゆる事柄を勝手に行っていたので、大抵のことは驚かなかつたのですが、「宝蔵を勝手に開いて……」ということには仰天したものです。外部の人から見ると宝蔵に何が入っているのやら、他の倉とどう違うのやら、全くわからないので、警察も全く宛になりません。むしろ、多勢に無勢で、こちらのほうが変に思われるくらいでした。

その後、法主が京都地裁に裁判を起こされ、十年もの歳月を要してようやく平成六年三月に判決が出ました。これは御遷化ごせんげになつた（同五年四月）翌年のことです、父・先代の他のあらゆる遺産とともにこの裁判も私が継承していましたので、私が判決をもらいました。

僧籍削除

ちなみに、この裁判に絡んで私が真宗大谷派の僧籍を削除されたことを思

い出しました。平成十年六月のことでした。「宗派を相手に裁判をするのは「反宗派的行為」であり、大谷派の僧侶にあるまじき行為である」というのが、その理由です（同十年六月十七日付『文化時報』）。そもそも、裁判を起こす権利は国民一人ひとりに平等に与えられたもののはずです。新聞が現在に至つても「僧籍削除」を、私の経験の一つとして挙げることがあります。新聞はその理由までは書きません。読む人は、まさかそんな「宗派相手に宝物の裁判を起こしたから」などが処分の理由になつているとは努々^{ゆめゆめ}思いません。「きっと、何か悪いことをしたから、追放されたんだろう」と思うのがふつうでしょう。そして、「僧籍を取られたんだから、もう坊主じやないんだ」とも思うでしょう。

このように、「僧籍削除」のみが独り歩きをして、私は風評被害を被つているのが実情です。

私は十歳の時、先代法主の弟子として得度をしていただき僧侶になりました

た。当時の大谷派が事務的に僧籍簿に記載しただけのことで、私としては、大谷派における僧籍の有無を意識したこと也没有。もちろん、先代法主に破門でもされたのなら、それは一大事ですが。

また、裁判を起こしたのは私ではなく先代法主であつて、私はそれを継いだだけなのですが、大谷派は、何か錯覚を起こしているのでしょうか。

来年も

さて、この後この裁判は、平成十一年三月、大阪高裁で、京都地裁とあまり違わない判決が出て、その半年後、最高裁で棄却、大阪高裁の判決内容が確定しました。

その結果、当方に三百九十六点の所有が認められ、同年十二月、大谷派より返却を受けました。一方、大谷派に所有権が認められたのは二十九点でした。宝物全体の九割強が当方の所有ということになつたのです。

これらの宝物は、いわゆる「たからもの」としての価値云々ではなく、本願寺の歴史を語るものとしてまことに貴重なものです。今後、さらに調査が進むにしたがって、少なからず新しい発見も期待できます。

はじめにも述べたように、来年もテーマを決めて展示していくこと考えていますので、是非ご覧いただき、本願寺の歴史に思いを馳せていただきたく思います。

讀者の頁

感想意見

神戸市須磨区 渡邊 信さん

「みめぐみの第五十部」拝読しました。世界を俯瞰するには異次元の世界に移る必要があると云う話は納得です。我々はいつまでたっても井の中の蛙、火宅の人ということですね。古希を迎えるとしている今、それだけでも自覚できればたいしたものですね。自觉しつつ煩惱を持ち火宅の人となる。これが凡人ですね。



寺務所からのお知らせ

お月見コンサート～月に寄せて

当夜は「皆既月食」

10月8日(水)午後7時より

本願寺 御堂一階サロンにてコンサートを開催いたします。

大谷楽苑コーラス・テノール独唱

マリンバと打楽器

【予定曲目】
「讃仰歌」より

「山の音樂家」おもしろ楽器紹介

「からたちの花」

「証城寺の狸ばやし」他

皆で歌いましょう。

どうぞお楽しみに！



入場料
一、〇〇〇円
（お月見団子とお茶付き）

定員
80名

（お早めにご予約下さい）

本願寺 寺務所

あとがき

みめぐみの刊行委員会

二回目の「近くて遠い？『正信偈』」は、光のお話から。光道台下は冒頭で「閃き」ということに触れられます。この『みめぐみの』御親教集は、毎号台下の「閃き」が満載です。今回も新幹線の車内アナウンスから阿弥陀様の本願へとつないで行かれます。英語は苦手な方でも、台下の「発想の転換」を追いかけるだけでも楽しくなるはずです。

また、後編では、なかなか聞きにくい事、或いは誤解、思い違いをしていた事をストレートにお話し下さいました。「……先代法主の弟子として得度をしていただき僧侶になりました」「大谷派における僧籍の有無を意識したことありません。……」と言い切られる台下のお言葉にスッキリされたのではないかでしょうか。

皆様からのご感想、ご質問をお待ちしております。どしどしお寄せ下さい。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。
『みめぐみの』1冊の価格は200円（税込）です。

○1冊～4冊 = 送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい

※送料 1冊=120円、2冊=160円、3冊=180円、4冊=210円

○5冊～9冊 = 送料は実費、振替手数料は不要です

※送料 5～6冊=210円、7～9冊=290円

○10冊以上 = 送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

みめぐみの 第51部

2014年7月5日 印刷

定価 200円

2014年7月10日 発行

著 者 大 谷 光 道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒616-8432

京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
本願寺寺務所内

TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220

振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株)中 外 日 報 社



みめくみの刊行委員会刊